



# 新九郎通信

発行 小田原市栄町2-13-3 (株)伊勢治書店3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

今年も稲穂が見事な黄金色に実り、新米のおいしい季節となりました。月、すすき、団子・・・身の周りにあふれる日本美が一段と輝きを増し、読書に映画、音楽に美術鑑賞と静かな時間が恋しくなる季節です。小田原では、9月22日の小田原映画祭を皮切りに第59回小田原市民文化祭が始まっています。今年も北原白秋にちなんだ催事も多く、様々な分野での発表が楽しみです。「芸術の秋」新九郎も素晴らしい展示が続きます。皆様のお越しをお待ちしています。

## 新九郎 10月の展覧会のご案内

## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 10/3(水)~10/8(月) 木楽九回展	木と向き合って70年 二宮義之 箱根細工の展示会
 10/10(水)~15(月) 第15回 湘展	身近な風景や静物等の水彩・油彩。絵画教室の作品展(講師:住谷重光氏)
 10/17(水)~22(月) 第12回フォト∞ムゲン写真展	7名の会員による写真展 風景等約60点
 10/22(月木) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
 10/24(水)~29(月) 第13回人生遊々展	旧三中三期生による作品展 水彩・油彩・水墨画・書・絵手紙・写真・盆栽・花・人形等
 10/31(水)~11/5(月) 森の木まぐれ三人展	女性3人による陶芸・染色・彫金作品。小田原の木材を使った展示台使用(山盛りの会協力)

会期・展覧会名	会場
10/18(木)~22(月) 第18回絵画研究会展	ツノダ画廊 0465-22-4250
10/24(水)~29(月) 第3回SUMI CLUB展	アオキ画廊 0465-22-0825
10/10(水)~15(月) アトリエバルフォーレ展	飛鳥画廊 0465-24-2411
10/17(水)~22(月) 絹を繡う会作品展	飛鳥画廊 0465-24-2411
10/3(水)~8(月) 第六回 楽の会 水彩画展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/17(水)~22(月) グループ・アトリエ展	お堀端画廊 0465-23-7819
10/2(火)~14(日) 横山洋子展	すどう美術館 0465-36-0740
10/2(火)~14(日) ノグチセツコ展	すどう美術館 0465-36-0740
10/18(木)~10/9(火) 三次元の蟻は垣根をこえる	すどう美術館 0465-36-0740
10/11(木)~14(日) 市民書展	生涯学習センターけやき 連絡先・山本 0465-36-5891
10/10(水)~14(日) 西相展	小田原市民会館 2F 展示室 0465-22-7146
9/30(日)~10/7(日)10/1 休館 南足柄市美術展	南足柄市文化会館2F 問合せ・湯川 0465-74-0772
10/3(水)~8(月) 第64回湯河原美術展	湯河原町立図書館 3F
10/6(土)~14(日) 吉田幸蔵遺作展	巨櫓の居 0465-49-6077
10/11(木)~23(火) 第4回 鉄道資料展	寄りあい処こうづ 0465-47-0933
9/27(木)~10/21(日)北原白秋 の挿絵世界-佐藤北久山	松永記念館 0465-22-3635
10/2(火)~7(日) 小酒井基紘展	丹沢美術館 0463-83-9550
10/9(火)~14(日) 田中太賀志展	丹沢美術館 0463-83-9550
10/16(火)~21(日) 竹村健の世界展“祈り”	丹沢美術館 0463-83-9550

## 小田原の街なみ再発見! 板橋・旧東海道の街なみ 2

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 加藤恭夫



旧道の街なみでひときは目を引く建物がある。重厚な瓦屋根、蔵造りを思わせるどっしりとした建物は内野醤油店。家の横には立派な蔵があり、奥に広い中庭が見える。今にも香ばしい醤油のにおいがしてきそう。

昭和9年にこのあたりを撮影した写真がある。かやぶき屋根の家と今と変わらぬこの建物があり、道には電車が走っている。その電車こそ明治33年に国府津、小田原、湯本間に開通した小田原電気鉄道だ。昭和9年に東海道線が小田原を通るまでは、箱根へ行く湯治客は東海道線を国府津で降り、この電車に乗り換えて湯本まで行った。国府津湯本間の乗車時間は2時間。ゆっくりと走る電車の音が聞こえて、今とはまた違うにぎわいを見せていたに違いない。

**第6回小田原映画祭**  
**11月23日(金・祝)**  
 「はじまりの記憶杉本博司」  
 会場: TOHO シネマズ  
**【舞台挨拶】**  
 杉本博司、中村佑子監督  
 監督: 中村佑子  
 出演: 杉本博司  
**【ゲストトーク】杉本博司**  
 会場: ダイナシティ1階キャニオン  
 ※数年後に杉本博司芸術文化施設が小田原に建設されます。

## 美術館訪問

## 青森県立美術館



東北自動車道の終点、青森インターを抜けるとすぐのところに青森県立美術館

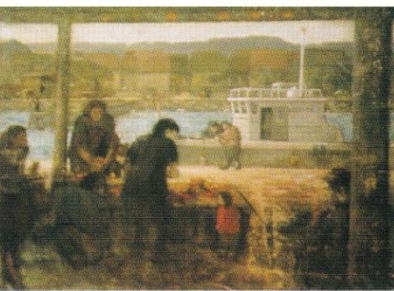
はあった。一般には三内丸山遺跡の方が有名かもしれないが、広大な土地に二つの施設は隣接している。駐車場からのゆったりとしたアプローチの先には、曲線を描いた真っ白な軒の白い建物、芝の緑、山の緑、青空と調和して建っていた。雪の季節には、同化してしまうのではと思わせる低く白い建物は近づいてみると、煉瓦の上からペイントされているような素朴なマチエールで、照明を兼ねたロゴが壁面を飾る以外美術館の名前も見当たらないシンプルな建物だった。

真夏の強い日差しの中、入口付近にはベテランスタッフがいて、ややわかりにくい入り口の案内をしてくれた。入口を入ると、無数の紙飛行機が空から出迎えてくれた。誰もいないフロアは静まり返っていたが、頭上の紙飛行機の群翔をしばし楽しみながら、美術館への期待が膨らんでいった。美術館は、明るい通路の先の別棟だった。薄暗い館内は冷房が心地よく汗だくの身体が助かった。ジーンズのスモックのような女性スタッフのユニフォームが、美術館をカジュアルな雰囲気にしていた。

企画展は「Art and Air」一空と飛行機をめぐる芸術と科学



の物語一だった。『飛ぶ』という人類の夢をいろいろな視点で見せていた。ダビンチのデッサンから石田哲也の絵画「飛行に関する写真」寺山修二の市街劇「人力飛行機ソロモン」の映像、スカイツリーの建設過程の映像を含む550点からの作品群。田宮のプラモデルから飛行実験の映像、JALの制服などいろいろなジャンルの資料が一堂に会し、子供から専門家まで十分に楽しめる見ごたえのある展示となっていた。富士山をバックにゼロ戦が隊列を組んで飛ぶ青空の写真が、戦争という現実を忘れてしまうほど美しくしばらく見入ってしまった。



と、静かな時間と清潔なリネルのシャツとヒースでつくったパイプ、毎日、青空の下でおもいきり精神を働かすのだ、じぶんの人生はじぶんできちんとつかかねばならない。12月19日〜24日「古澤進追悼展」を開催いたします。ぜひご覧下さい。④

常設が大変充実していた。奈良美智をはじめ棟方志功、斎藤義重など青森出身の作家は多い。部屋一つが一人の作家というようなコミッションワーク風に展示されて



られていて「棟方志功」の部屋「成田亨」没後10周年を記念するウルトラマンや懐かしい怪物たちの原画がたっぷり展示された部屋、寺山修二の部屋、彫刻の部屋、中でも奈良美智のコミッションワークは、かなり広く作られていて、日本では珍しく写真撮影可能なスペースもあり、参加型の展示をたっぷり楽しむことができた。「あおり犬」は、外の暑い日差しに耐え、目を閉じ耳を垂れた姿勢で建物の方を向いて立っていた。何かの音を聞いているような、いつまでも見飽きない刺激ある作品だった。雪の季節にはまた違った表情をみせてくれるのだろう。



メディアでもよく紹介されるシャガールのバレ「アレコ」の舞台の背景画は、天井の高い広いホールの三面に堂々と置かれていた。その大きさにも圧倒されたが、シャガールの魔力が満ちている部屋の中央に置かれた椅子にすわると、パリのオペラ座にでもいるような贅沢な気分になった。茶の柔らかいジュータンと高い白壁、ここではきっと演奏会やお芝居を楽しむ使い方もされるのだろうと想像できた。

ずいぶん長いことゆっくりと見た。作品も楽しかったが、建物も十分楽しめた。通路の高い壁が土のようで本物なのかと思わず触ってみたが本物の『土壁』で驚いた。三内丸山遺跡にある県美らしい青森らしさだ。白い壁面と『土壁』『土床』という伝統的な素材が新しい。ミュージアムショップ、食堂も青森特産のものを使ったメニューが工夫されていて、

一人で、家族で ゆっくりと一日過ごすことのできる静かで文化の香りのする場所になっていた。

2006年に建てられた青森県立美術館は、県立としては日本で一番最後に建てられた美術館だという。一番最初が1951年鎌倉の県立近代美術館であるから、この50年で美術を取り巻く状況も、美術館に求められる役割もずいぶんと変化してきた。今までの『美の殿堂』型美術館は食傷気味な時代になり、運営はどこも窮地に追い込まれているのが実態らしい。長い間「いい美術に触れられる場所」として『いい美術に触れてください』という啓蒙をしながら運営されてきた時代から、いかにして特徴ある美術館をつくるかということに時代は変わってきている。

ミュージアムショップで求めた『アーハウス NO.3』の、設計者青木淳氏の話が興味深い。県美は県立美術館としての未来像をどう描くかを課題に取り組んでこられたという。青森の冬は寒くて長い。しかも若い人もお年寄りも公共の場で行くところがあまりないのだからという。そんな人々が冬でも集まれる「街角」「町」が望まれていると感じ、その町が広い意味での芸術に使えるということを目指したと言っていた。

15年前『水戸芸術館』で、ホワイトキューブが美術館としてふさわしいという考えが浸透し、「直島」では、作品に合わせて空間自体を作りこんでしまうことを安藤忠雄がやった。さらに『金沢21世紀美術館』では、常に高企画の展示をやり続けるのではなく、いつ行ってもコミッションワークが楽しめるという美術館を実現した。県美でも、企画展のスペースよりコミッションワーク的な常設展の部屋を大事にしたつくりになっている。また演劇やコンサート、映画祭なども行い、美術という決まったジャンルのための空間と思われていた美術館を、もっと大きな広がりを持った活動の場所として活用し、芸術の融合を図ろうとする意思が伝わってきた。小田原にもこれから市民ホールができる予定だ。「文化は人を呼びます。小田原が文化を大事にして栄えていきますようお願いしています。」小田原映画祭のゲスト樹木希林さんの舞台あいさつがとても心に残っている。

【新九郎友の会 木下和子】

## 9月のこと

西相美術協会会員の古澤進さんが亡くなられた。古澤さんは30数年前、第二金土デッサン会で知りあった。私は当時5年ほど通ったであろうか、その後仕事が忙しくなりやめてしまったが、古澤さんは西相展、市展、公募展などに出品を続け、色々と受賞を重ね精力的に絵を描いていたようだ。10年前銀座商店会主催の「街なみ再発見！展」が始まり古澤さんも出品された。また所属されている水曜会のグループ展も新九郎で開催されるようになったり、また古澤さんに会えるようになった。平成17年には新九郎で個展も開催していただいた。新九郎に寄るとよく話をしてくれた、古澤さんと話すのは楽しい時間だった。古澤さんの近年の絵は淡いブルーとセピアを基調にした、コロコロを思わせるいぶし銀のような美しい画面だった。古澤さんはマチエールに凝っていて、コールドタルとか油絵具以外のものを混ぜたり、画面を削ったり色々試していたようだ。「描くより見ている時間のほうが長いんだよ。」とも言っていた。小品でも一枚の絵に2〜3か月はかけるそう。2年ほど前「第二金土デッサン会展」に出した裸婦の絵がよかった。褐色の画面に裸婦が後ろ向きに立ったポーズだが、古澤さんは絵を逆さに置き、「最初はこの向きで描いていたんだよ。」と言った。見ると正面向きの裸婦である。これを逆さにすると胸が画面の下になり、乳房が尻として描かれているのだ。絵をさかさまにして眺めたり、良い絵を描くために色々工夫を凝らしていて感心したものだ。

古澤さんは早川港をよく描いていた。港というよりもそこで働く人々をよく描いていた。「港が好きなんだよ。」と言っていた。繰り返して働く人々の色んなシーンを描いている。休みの日魚市場の片隅にイーゼルを立て、働く人々や港を眺めながらキャンバスに向かう。古澤さんの至福の時間が目に浮かぶようだ。自分の好きな時間、大切な時間を十分に味わいながら

さん」の一節を思う。「なくてはならないものは、自由